

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

仮面ライダー電王

【作者名】

daisy

【あらすじ】

聡美は特異点だった。イメージが憑依したことで、電王として戦っていくことを決意した聡美だが……。

01・変身

野上^{のがみ} 聡美^{さとみ}は自転車を漕いでいた。

その聡美に黄色の光の球が接近する。

光の球は聡美の体内に入り、砂を溢れ出させた。

「お前の」

グシャ！ 自転車のタイヤに踏みつぶされたイマジン。

聡美は気付くことなく漕ぎ続ける。

「ん？」

道端にライダーパスが落ちていっているを見付ける聡美。

「落とし物……交番に届けなきゃ」

聡美は自転車を止めてライダーパスを拾った。

「お前の望みを言え」

その声に聡美は振り返る。

「れ、霊^{たま}」

そこには鬼のような姿をしたイマジンの幻体があった。

「そんなものと一緒にするな！ 俺はイマジンだ！ いいか？ 今か

ら言っからよーく聞けよ」

イマジンは言った。

願いを叶える代わりに時間をいただく、と。

「お願い」とねえ……」

聡美は考えるが何も浮かばなかった。

「特^{とく}にないわ」

「じゃあ暫くお前と一緒にいさせてもらっつぜ」

イマジンは消えた。

「あ、そっだ」

聡美は自転車に跨がり、交番へ向かった。

時刻が午後二時二十二分二十二秒になった瞬間、聡美が交番の扉を開けると、その向こうに荒野が現れ、デンライナーという電車型のタイムマシンが止まっていた。

「え？」

デンライナーから乗務員が出て来てコーヒーを渡してくる。

「コーヒーどうぞ」

「い、いや……」

乗務員はデンライナーの車内に戻って行った。

聡美は疑問に思いながらも扉を潜って交番の前に戻って扉を閉める。

(何だったの？ 一体……)

聡美は自転車に乗り、交番を離れる。ポケットのライダーパスの存在はすっかり忘れていた。

「おい、願ひ事は決まったか？」

「うつつ」

信号のない交差点。

通過しようとした刹那、自転車ごと車に撥ねられる聡美。

「うわああああー！」

聡美は勢いよく吹っ飛び、突き当たりの丁字路の前に屯たむろしている不良グループの前に落下した。

「何だおめえ？」

「よく見りゃ可愛いじゃねえか。俺たちと遊ぼうぜ？」

「え？ いや……」

イマジジンが聡美に憑依する。

「うるせえんだよ。とっとと失せろ！」

「何だと？」

不良グループの一人が聡美を蹴り倒した。

「ぐー！」

尻餅をつく聡美。

「痛えな！」

聡美はすつくと立ち上がり、不良グループを完膚無きまでに叩き潰した。

「やべえ！ 殺されるー！」

不良グループは逃げていった。

聡美の中からイメージンが離脱する。

「あ、あんた、何てことしてくれてんのよー!」

「怪我を負いそうだったからな。大事な契約者に傷でも負われたらこっちにも影響するんでな」

「そうなんだ」

あれ? と、足下に何か落ちていることに気付く聡美。

不良グループの一人が持っていたキーホルダーだ。

「さっきの人たちのかな?」

「戦利品だ、もらっとけ」

「ダメよ。返さなきゃ」

聡美は自転車で不良グループを追い掛ける。

「待ってー!」

振り返る不良たち。

「うあわあああー!」

悲鳴を上げる不良たち。

「助けてくれー!」

不良グループの一人がそう叫ぶと、その彼の体から砂が溢れ出し、

「ウモリ型のイメージン、バットイメージンが姿を現した。

「承知した」

バットイメージンが聡美に襲い掛かる。

「うわー!」

自転車が倒れ、衝撃で吹っ飛ばす聡美。

すると、そこにハナという女性が現れた。

「変身してー!」

「え?」

ハナを見上げる聡美。

「ライダーパス、拾ったでしょ? 見てたわよ」

聡美は拾ったライダーパスを思い出した。

「ライダーパスってこれ?」

ライダーパスを取り出す聡美。

「それがあれば電王に変身出来るわ」

「変身？」

「いいから」

「何だか分かんないけど……」

聡美はバットイマジンの方を向いて構えた。

デンオウベルトが聡美の腹部に出現する。

「へ……変身」

聡美がライダーパスでバックルをタッチすると、光に包まれて電王・プラットフォームに変身した。

自分の体を改める電王。

「じ、これは……？」

「電王。やっぱり特異点だったのね」

「特異点だあ!？」

鬼イマジンが驚く。

「何が何だかさっぱりだけど、戦えばいいのよね？」

電王はデンガッシャーを剣状に組み立てた。

バットイマジンに接近し、斬りつけると、その体から火花が散った。

「汚い火花だ」

電王はバットイマジンに反撃のチャンスを与えずに連続攻撃を浴びせしていく。

グロッキーになるバットイマジン。

「お姉さん！ トドメはどうやって刺すの!？」

「ベルトのボタンを押して交代して……」

「交代？」

電王はベルトの赤いボタンを押した。

電子音が鳴り出した、

「なるほど」

ライダーパスでバックルをタッチする電王。

{ SWORD FORM }

電子音と共に鬼イマジンが電王に憑依し、アーマーとデンカメンが出現し、電王はソードフォームに変態した。

「へっ、トドメだ……」

電王はライダーパスでバツクルをタッチすると、パスを投げ捨てて構える。

「必殺、俺の必殺技、パートワン！」

デンガツシャーの刃が外れ、電王がデンガツシャーを振り回すと、その刃がバツトイマジンを爆破した。

刃がデンガツシャーに戻る。

電王から鬼イマジンが離脱し、変身が解けた。

そこへ現れるデンライナー。

「さ、さっきの……」

「時間を移動する列車なの」

「タイムマシン？」

「そうとも言つわ。さ、乗って。みんなに紹介しなきゃ」

聡美はハナと共にデンライナーに乗り込んだ。